



TITLE:

笠山雜觀

AUTHOR(S):

小牧, 實繁

CITATION:

小牧, 實繁. 笠山雜觀. 地球 1925, 4(4): 309-312

ISSUE DATE:

1925-10-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/183005>

RIGHT:

(譯)

(2) H. Washington: Chemical Analyses of Igneous Rocks 1917. p. 463.

(8) 鵜水鏡五郎—大正三年噴出新硫黃島消失經路(東洋學藝雜誌大正九年六月)

(6) F. u. Wolff: Dr Vulkanismus 1923. s. 140—141

(10) T. Ogawa: Notes on the Volcanic and Seismic Phenomena

笠 山 雜 觀

小 牧 實 繁

in the Volcanic District of Shinbura, with a Report on the Earthquake of December 8 th, 1922. (Mémoires. col. Sci. K. I. U. Series B. Vol. I. No. 2.) p. 139—247.

(11) 中村左衛門太郎—關東大震災調査報告(震災豫防調査會報告第百號(甲)一一九頁)

(12) H. L. Alling: Journ. Geol., 1921, vol. 29, p. 253.

長門笠山に就いては既に早く鈴木敏博士が明治三十六年五月號の地學雜誌及び山口圖幅地質説明書に於て簡潔にして要を悉せる興味ある記述を試みられ其の遠景並びに噴火口のスケッチをも示された。豫て博士の記載によつて興味を喚起せられ踏査の機會を狙つて居た余は大正十一年秋十一月長門峽の調査を試みての歸途萩に出て此の小火山を訪れる事とした。火山號の發

刊に際し當時の日記を基とし記憶を喚起しつつ、此の一篇を草する。

萩の東を北流する阿武川の分流松本川を松本大橋によつて東に渡り松下塾址を訪れた後縣道を北して前小畑後小畑を過ぎ縣道から分れて里道を西する事少許にして越ヶ濱に出る。越ヶ濱は長門本土と元來海中の一火山島であつた笠山とを連結する砂洲上に發達し北に嫁瀆港南に夕

湘港^{ナギ}を控え小數の酒屋呉服屋等の存する外住民の大部分は殆んど農耕せず又副業として養蠶を行ふの事もなく先づ純粹に漁業を生業とし家屋の屋根は立派な赤瓦を以て葺かれた割合に景氣のよい漁村である。其の地盤が元來海中に發達した砂洲である關係上飲料水の良からう筈なく數年前までは數町北の海岸まで遙々水を汲みに行かねばならなかつた。男子は漁に出て、水汲みとランプの掃除とが婦女子の果すべき仕事であつた。其れが最近には山の手に貯水池が作られ水道が引かれ又電燈も點せられて婦女子の課業は一時に輕減せられたので近來は萩方面へ女中奉公等に出稼ぐものが多くなつたと云ふ。

聚落の西端に嚴島明神が祀られ祠前に海水の通ずる池があり、越が濱の漁夫神に祈念する時は海のもの一尾を此處に放ち禁漁する故此處に諸種の魚類が繁殖し恰も天然水族館の觀を呈して居る。

神社の背後には風穴が存する。此處より笠山に登るに黑色多孔質の玄武岩塊が碌々として横

はり樅櫟等の喬木其他の灌木が茂生し、其の中に牛を放牧して居る。土人の語る所によれば其の數數十頭もあらんかこの事であるが實際は不明であるらしい。余を案内下すつた阿武郡役所の厚東晴二氏は萩土着の人であるが氏の談によれば其の數百頭に達すべく放牧せるため其の質兇暴で之れを市場に出す爲には一應牛小屋にて馴牧する必要がある、此等は多くは笠山北麓の海岸で自然繁殖するのであるが以前は此の笠山北方の海岸樹木の繁茂せる方面には猿類多く棲息し往々聚落に出て小兒を害した事もあつたとの事である。笠山斜面の或る部分には落花生、薯、乳牛の乾草等を栽培した所があり、其の耕地の周圍には黑色玄武岩を以て石垣を繞し放牛の害を防いで居るが一種の景觀を呈して遊子の目を牽く。

黑色玄武岩の構成する山の斜面は大體甚だ平坦で臺狀をなして居るが頂部に達すれば玄武岩は赤紫色となり勾配は稍急となり以て臺上の火山錐を形成し中央に噴火口を抱いて居る。其の

周囲深度形狀等は既に鈴木博士が記載せられた如くで内壁は新鮮な赤紫色多孔質の玄武岩である。其の底部には犢の遺骸の生新しいものが横たはつて居たが之れは其れと知らずに噴火口上を徘徊した哀れな犢の最期と知れた。

噴火口上に登攀し其の北角に座して四周を眺望するに櫃島、大島、肥島、羽島、尾島、相島の六島、遠くは見島近くは眼下に九島を望むべく、九島は饅頭の如く高く羽島は盆の如く扁平に、肥島、櫃島、大島、尾島、相島、見島又略扁平である。此等は凡て笠山と同じく玄武岩の臺地である。

厚東氏の談によれば見島は戸數四百、大島は三百もあるが櫃島には人家僅かに七軒あるのみ、一家族は十數人の大家族であるが七軒以上に分家する事を禁ずる制度になつて居るとの事である。此れは余が同年夏石見國青野山上で津和野土着の來原末男氏より聞かされた石見益田沖の高島（青野山より見える）の七軒家の制度と同一のもので飛驒山中の大家族制度等と併せ考ふべく地

理的事情と經濟事情、經濟事情と家族社會制度との關係を暗示する興味ある事實である。尙厚東氏の談によれば見島は凡て農耕するが農耕は天然水によるのであるから旱魃は直ちに不作を招き島民の出稼を促す、肥島には珍奇なる瓜を産し之を湯にて燂で更に水に浸せば素麵の如き筋となるが之れを肥島瓜と稱す、羽島には赤瓦葺の家數軒あり萩の高須氏夫人支那人をして豚を養はしむ、而して此等六島の村役場は六島村の圈外なる萩町の着船所附近にあり、之れは此の地が村役場の地として最も便利の地であるからとの事である。沿岸島嶼の地理が又甚だ興味ある研究の對象であるのを知るべきである。

笠山の北麓には凹所三ヶ所あり其れ等は略北西南東の一直線上に位置して居るが之れは恐らく小噴火口の一列で辻村太郎氏が昨年の科學知識誌上（富士山號）に記載せられた富士山腹の側火山列や櫻島の新噴火口列等と略同様の意味を有するものであらう。此の凹地附近は最も多く放牛の集り又以前猿類の多かつた處であると云

ふ。

噴火口を下り中腹より南東を望めば狐島、中ノ臺、鶴江臺の三臺を認め得る。此等の臺地も又覆盆の如く扁平で森林を以て被覆せられ其の間に杉垣を繞した密柑島があり其の他、馬鈴薯甘藷、大豆、小豆、大根等を栽培した所もあり斯かる扁平の臺地は萩地方の方言では之を臺と稱すると厚東氏は語られた。之れ又凡て玄武岩臺地である。

斯くの如く萩地方は玄武岩が甚だ豊富であるから従つて之れを石材とし石垣土臺石等を使用するもの甚だ多く志都岐山神社を祀れる舊城址

一帯、堀内^{かりす}附近の舊藩士邸の石垣等は殆んど凡て黒色の玄武岩を用ひ其處に萩特有の文字通りの地方色が現れて居りブリュンが「佛蘭西國民史」中の「佛蘭西人文地理」第十四章 Types Régionaux De Maisons Et Carte Générale Des Tois 中に述べた様な事が全く虚構でない事を點頭かせるのである。

擱筆するに臨み往年終日案内の勞をとられ幾多の教示を賜はり又深更萩埠頭に余を見送られたる厚東晴二氏の厚意に對し深甚の謝意を表する。(一九二五・八・四)

地理教材としての地形圖 (十五)

寒 風 山

陸地測量部五萬分ノ一男鹿島一號「船川」同五號「戸賀」右の二葉の地形圖を連ぬれば秋田縣の

男鹿半島の地圖となる。男鹿半島は元來は島であつたが二つの砂洲で陸地に結ばれたもので其